

次世代下宿「京都ソリデール」事業による住まい方に関する研究

—高齢者と学生の異世代ホームシェアの課題と効果—

主査 是永 美樹^{*1}

委員 和田 蒔^{*2}, 片木 孝治^{*3}

高齢者の自宅に学生が同居する異世代ホームシェア「次世代下宿『京都ソリデール』事業」を対象に、間取り調査とヒアリング調査を行い、シニアと学生は最小限のルールのもとで互いの生活スケジュールを守りながら、適度な距離感による関係性を築き、安心感と日常的な交流を得ることによる生活環境の向上と精神的な充足感を得ながら、異なる世代からの刺激や学びによって自己の成長を実感できる住まい方となっていることを把握した。一方でシニアの自宅に「同居する」学生の立場からは、学生の個室から共用スペースに行く際に、シニアの個室の前を通らない動線、リビングに寄ることを状況に応じて選択できる動線の確保が望ましいことを指摘した。

キーワード：1) 異世代ホームシェア, 2) 京都ソリデール, 3) マッチング, 4) シニア, 5) 若者, 6) 生活スケジュール, 7) 日常の交流, 8) 自己実現, 9) ルールと配慮, 10) 選択的動線

RESEARCH ON THE WAY OF LIVING IN THE 'KYOTO SOLIDAIRE'

- Subjects and benefits of Intergenerational home-sharing between seniors and young people -

Ch. Miki Korenaga

Mem. Fuki Wada, Koji Katagi

This study clarified the way of living on the intergenerational home-sharing 'Kyoto Solidaire' with seniors who house owners and students. They live together by maintaining an appropriate distance between them and keeping their own daily schedules. After living together, they feel safety freed from loneliness and enjoy communications, get the opportunities for feeling their own growth, especially for students. On the other hand, from the view of the students live in the seniors' homes, it is preferable for students to go entrances and bathrooms not passing in front of senior's private rooms, and to join living-rooms depend on their feelings.

1. 研究概要

1.1 研究の背景・目的

単身者又は夫婦のみの世帯の増加、急速な IT 技術の進歩や新型コロナウイルスの影響による対人コミュニケーションの機会が減少し、孤独、孤立を感じる人が増えていることは現代社会が抱える大きな課題である。このような状況に対し、家族以外の人との交流を求めた居住形態であるシェアハウスは、一つの住まい方として認知されている。なかでも近年、孤独や孤立した状況になりやすい高齢者と若者が同居する「異世代ホームシェア」が全国で増えつつあり、世代間交流の促進、住宅問題や孤独解消、空き家や空き部屋対策など、多方面の社会課題に対する解決策の一つとして注目されている。しかし、これらの運営は地域の NPO や民間の事業者によるものがほとんどで、居住支援の萌芽的な取り組みといえる。

京都府内でも、特に京都市内の高齢化率は全国平均より高く、世帯人数が二人以下の世帯の割合も高い。一方、

京都には大学が多く立地しているため、毎年一定数の若者が流入するが、卒業後は他府県へ移住する学生も多く、定住人口の増加にはつながっていない。このような課題に対し京都府では、高齢者の持ち家に学生が同居する「次世代下宿『京都ソリデール』事業」（以下、「京都ソリデール」）を 2016 年より開始し、一定数の成果をあげている。「京都ソリデール」では家族ではない他者が同居するため、プライバシーの確保や生活ペースの違いなどが懸念されるが、これまでに居住実態に関する調査は報告されていない。そこで本研究では、「次世代下宿『京都ソリデール』事業」を対象に住まい方の実態調査を行い、世代の異なる他者が同居する「異世代ホームシェア」に関する住宅計画学的な知見を得ることを目的とする。

1.2 既往研究と本研究の位置づけ

本研究に関連する既往研究として、高齢者と若者の異世代間シェア居住について、先駆的なアメリカの事例を

^{*1} 京都女子大学 准教授, ^{*2} 岐阜工業高等専門学校 助教, ^{*3} 株式会社応用芸術研究所 代表取締役

対象に、住空間の共用の仕方とコミュニティ形成の関係を考察した研究^{文1)~文3)}があるが、「シェア居住」で課題となる浴室や玄関などの使い方については、日本の住宅事情や生活慣習に当てはまらない点も多い。このほかに、ヨーロッパ各国と日本の異世代シェア居住に関する研究^{文4)~文7)}や、フランスやドイツの高齢者と若者が同居する異世代ホームシェア事業の運営システムに関する研究^{文8)~文10)}がある。これらは、異世代ホームシェアを運営する事業者と大学や行政の組織連携、業務分担などの制度やシステムといった運営団体のサポート体制を詳説した上で、日本の運営体制の脆弱性を指摘している。

空き家や空き部屋対策としての異世代ホームシェアの可能性を検討する研究^{文11)}では、学生の利便性を優先した別玄関の増築可能性と高齢者の意識調査から空き家予備軍を評価する指標を導いているが、生活動線を分ける場所を玄関に絞って評価しており、他の動線や共有空間の使い方等については言及されていない。

本研究の調査対象である「京都ソリデール」に関しては、シニアと学生の同居による心理的効果に関する調査^{文12)}がある。この調査では福祉医療の観点から、シニアと学生にインタビュー調査を行い、双方が安心感や交流の楽しさを得られていることに加えて、シニアは学生を支援しているといった充足感、学生は自己の成長を感じていることなどの効果を把握している。一方で、気遣いや心配事が増えるといった側面も指摘しているが、具体的な住まい方までは調査の対象とはなっておらず、心理的なストレスとの関連までは把握されていない。また、「京都ソリデール」について学生側の利用実態を調査し、同居後の学生の気持ちの変化を考察し、学生の将来的な成長につながることを期待できる住まい方としての可能性を評価した研究^{文13)}がある。本研究は、これらの既往研究を参照しながらも、間取りと住まい方の実態を照らし合わせることで、シニアと学生双方が心理的な負担を軽減できるような計画学上の知見を探るものである。

1.3 研究方法

第2章では、「次世代下宿『京都ソリデール』事業」の概要と実績、事業主体である京都府と運営を担うマッチング事業者へのヒアリング調査から、事業の背景や課題などを整理する。第3章ではシニアと学生の「京都ソリデール」に参加した動機と同居後の効果について、心理分析の方法を援用して考察する。第4章では、シニアと学生双方の生活スケジュール、同居する際の生活のルールや互いへの配慮を分析する。第5章では、間取り調査とヒアリング内容と併せて考察し、シニアの生活を守りながら、同じ住空間を共用する上で、学生の心理的な負担を減らしながら、両者が快適に過ごせるような住宅計画上の知見を得る。

2. 次世代下宿「京都ソリデール」事業の概要

2.1 次世代下宿「京都ソリデール」事業

「次世代下宿『京都ソリデール』事業」は、高齢者(以下、シニア)の自宅の空き室を学生が低廉な居住費負担(家賃等)で賃貸することで、異なる世代が同居・交流する新しい住まい方を提案する事業である。「ソリデール」はフランス語で「連帯」を意味している。

事業主体は京都府で、企画や広報を担い、実際にシニアと学生を繋げる役割は「マッチング事業者」と呼ばれる複数の事業者が担う。マッチング事業者によって細かい手順は異なるが、主に図2-1のような流れで同居に至る。対象となるシニアは55歳以上で、学生の居住費負担は3.5万円程度まで(光熱費別等)、シニア側の食事提供の有無は決められていない。

2.2 京都府建設交通部住宅課計画係へのヒアリング調査

事業主体である京都府建設交通部住宅課計画係の担当者へヒアリングを実施し(2022年9月7日)、事業開始の背景と準備について整理した。

①事業開始の背景

京都では大学進学により流入した学生が、卒業後は他都市へ流出し、京都に定住していないという課題を抱えていた。一方、世帯主が65歳以上の高齢夫婦または高齢単身世帯数の割合が徐々に増加し、2035年にはこれら的高齢世帯が総世帯数の約3割になると推定されている。加えて、高齢者の持ち家率は高いが、空き室が多い事が推測されていた。このような課題を抱えるなか、京都全体の活力を上げる取り組み「京都府地域創生戦略」^{注1)}の一環として、若者が京都の魅力を知り、愛着を感じるようになる方法として、当時ヨーロッパで注目されていた「異世代ホームシェア」に着目した。学生が地域のことをよく知るシニア宅に低廉な家賃で同居しながら地域の文化や魅力に触れることは、地域の活性化にもつながるのではないかと期待があった。以上の経過から、京都府はシニアと学生が同居することで自然に交流し、卒業後も学生と京都の縁が続き、将来的にも関わりたくなるような関係を築く場となることを目指し「異世代ホームシェア」事業を立ち上げる事になった。

②事業開始の準備

事業検討時、国内における「異世代ホームシェア」の先行事例は少なく^{注2)}、事業主もNPO法人や任意団体、大学の研究室などで、地方公共団体が携わっている事業はなかった。一方、ドイツ、スペイン、フランスなどではすでにかんりの実績があり、特に「パリ・ソリデール」では4000件ほどの同居の実績があった。「パリ・ソリデール」は、2003年の異常気象による猛暑で一人暮らしの高齢者約1万人が熱中症で亡くなったことを背景に、高齢者の生活支援の事業としてスタートした。高齢者に対

する生活支援の程度や、学生生活の優先度合いにより家賃が段階的に設定されている。

京都府は、京都に愛着を感じる若者を増やすことが地域創生につながると考えていたため、高齢者支援を前提とした印象を与えるような家賃区分をしていない。また、創設時の事業主は地方公共団体だが、将来的には「京都ソリデール」が住まい方の一つの選択肢として社会に認知され、自立した経済活動として不動産市場で運用されることを期待している。

2.3 マッチング事業者の役割と課題

京都府から委託を受け、シニアと学生のマッチングや、同居後のアフターフォローを行うマッチング事業者^{注3)}（表 2-1）にヒアリング調査を行った。

「株式会社応用芸術研究所」は、本業のまちづくりや学生キャンプ事業を通じて若い世代と関係を築いていることを強みとしている一方で、シニア層の獲得に苦慮している。定期的にシニアに向けた説明会を兼ねた「茶話会」を開催し、参加したシニアと学生の中で条件や性格が合いそうな両者をマッチングするなど尽力している。また、「京都ソリデール」をサポートする学生支援団体をつくり^{注4)}、マッチング過程での細かいサポートやちょっとした困りごとや悩みを聞くことで、大きな問題に発展しないような段階的なサポート体制を整えている。

「NPO 法人くらしこープ」は、高齢者生協を母体とする組織であるためシニア層とは関わりが深く、ソリデール事業に携わる以前より「共住プロジェクト」^{注5)}を実施しており、「京都ソリデール」を通じて一緒に住む若者の獲得がしやすくなった。事業の特性から、高齢者のサポートを得意とする一方で、若者に接する機会が少なかったため、「電話やメールをしても返事がない」、「短文で用件のみの連絡が前触れもなく来る」など、同居する「現代の若者」とのコミュニケーションの方法に悩み、本業の時間が割かれることが多々ある。

「株式会社 Localize」は福知山市を拠点にまちづくり事業をしており、そこで知り合ったシニアや行政からの薦めから、顔の見えるコミュニティを活かした信頼関係をベースにしたマッチングを行っている。

マッチングについては、各事業者の本業をベースとした特徴がみられる一方、新規希望者の獲得や面談、その後の顔合わせやアフターフォローに時間と手間がかかり他の業務に負担が生じていること、不動産業者ではないため一般賃貸住宅の仲介手数料をもらえないことを3事業者が共通して課題に挙げており、事業の負担の割には採算性が低いことを指摘している^{注6)}。3事業者とも「京都ソリデール」の目的や意義には共感しており、今後もマッチング事業を継続する意思はあるものの、事業の効率化やアフターフォローの負担軽減を模索している。今

後も丁寧なサポートを続けるためには、マッチング事業者の負担軽減、事業者間の情報共有の仕組み、事業にかかる経費負担軽減などの検討が望まれる。

2.4 「京都ソリデール」事業のこれまでの実績

2016 年度の事業開始から 2024 年 3 月末時点で、計 67 人の学生に対し、シニアとの同居が成立している^{注7)}。

はじめにこれまでの全 67 件をシニア宅別に整理した（表 2-2）。これまでに学生を受け入れたシニア宅は 26 件で、そのうち 17 件は 2 名以上の学生を受け入れており、「京都ソリデール」という暮らし方になんらかのメリットを感じて学生を繰り返し受け入れている。特に世帯 No ①～⑧、⑭、⑮は 3 名以上受け入れ、⑨、⑩では 3 人目を希望している。3 章以降の事例調査では、これらの複数の学生を継続して受け入れているシニアに着目し、そのなかで調査にご協力いただける 7 事例の間取り調査と、シニア（9 名）及び調査時に同居している学生（9 名）と同居は終了しているがヒアリングが可能な元の同居学生（3 名）に住まい方のヒアリング調査を行った（表 2-8）。

まず、シニアと学生の性別を整理した（表 2-3）。シニアは、女性が 52%、夫婦が 42% でこれらの合計が 94%、単身男性のシニアはかなり少ない。一方学生は、女子学生が 41 名で 61%、男子学生が 26 名で 39% であり、やや女子学生の方が多い傾向がみられる。

次にシニア宅の立地する地域は、京都市内の北区、左

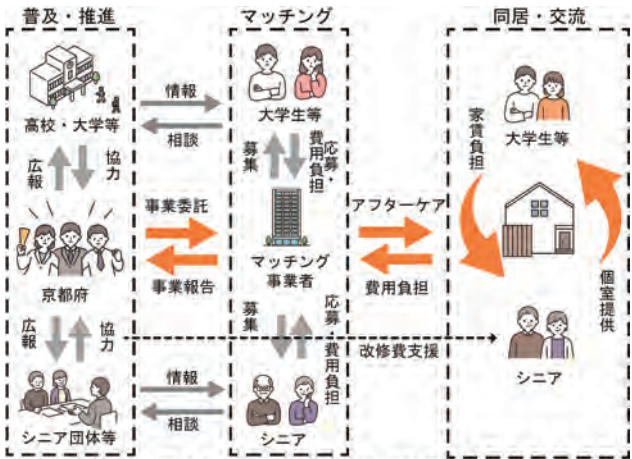


図 2-1. 京都ソリデール事業の流れ

表 2-1. マッチング事業者の特徴

事業者名	事業内容	マッチング開始年	事業を始めた背景
株式会社 応用芸術研究所 （ヒアリング： 2023 年 3 月 30 日）	・京都や福井を拠点に地域まちづくり事業 ・若者と地域の人々が共に作品をつくるアートキャンプ事業	2016	福井県で若者と地域の人々が共に暮らし交流するキャンプ事業の経験が、今後の住まい方の一つの選択肢になると考えた。「京都ソリデール」事業の開始を知り、都市部である京都でも、未来の住まい方の形になる、と考え、マッチング事業の受託に至った。
NPO 法人 くらしこープ （ヒアリング： 2023 年 5 月 15 日）	・年齢に関わらず様々な世代が同居する「共住プロジェクト」を実施。 ・高齢者生協として高齢者の生活支援。	2016	共住 PJ に参加するシニアの中から若い世代との同居を求める声があった。ちょうど同じ頃、京都ソリデールが開始されることを知り、共住 PJ のシニアの希望に添う学生を募集できると考え、マッチング事業に応募した。
株式会社 Localize （ヒアリング： 2023 年 9 月 19 日）	福知山市の商店街などを中心に地域活性化活動	2017	福知山公立大学谷口教授からの紹介で京都ソリデール事業を知り事業に応募した。

京区が多く、この2地区には大学が多く立地していることが関係しているのではないかと考えられる（表 2-4）。一方、東山区、下京区、南区では同居に至った事例がない。東山区は京都市内でも高齢単身世帯の割合も高いことや、この3エリアは観光化による影響で居住環境の悪化なども課題となっており、「京都ソリデール」を通じて学生を地域に誘導することは、今後の地域全体の住環境にも有効な手段の一つになると思われる。

次にシニアの住宅形態をみると（表 2-5）、「離れあり」や「店舗併用住宅」を含めて「戸建て」が8割弱を占め、「集合住宅」はほとんどない。後述するが、集合住宅でも間取りによってはソリデールに適していることもあるが、広さに余裕のある「戸建住宅」のほうが部屋を確保がしやすいと誤解されていると考えられる^{注8)}。

次に学生の出身地をみると（表 2-6）、首都圏や地方都市出身の学生の他、京都以外の近県からの学生も1／3程度いる。これらの学生は、通学に2時間程度かかる遠距離通学をしている。通学定期の費用と「京都ソリデール」の家賃と比較してもそれほど変わらない場合、授業が忙しい学年の1～2年間だけソリデールを選択することで、往復にかかっていた通学時間を勉強やサークル活動などに充てることができる、地方出身の学生だけでなく、

遠距離通学の学生にとっても通学条件を改善する一つの選択肢となっていることが窺える。

次に、全67件のうち情報の得られた51件の家賃をまとめた（表 2-7）。上限が3.5万円程度とされていることもあり、2～3万円が9割（46/51件）で、京都市の学生の家賃相場の4.32万円^{注9)}に対して、「京都ソリデール」の家賃は低く抑えられていることがわかる。また、賃貸住宅を借りる際の初期費用（敷金、礼金、仲介料など）、家具・什器代、洗濯機や冷蔵庫といった設備機器を購入する必要がないため、学生側の費用対効果は大きい。

3. 「京都ソリデール」への参加の動機と同居の効果

3.1 「マズローの欲求段階説」の援用と交流の分類

本章では、「京都ソリデール」をしようと思った動機、同居した効果についてヒアリング内容を考察する。

そもそも現状の居住環境に満足している場合は、あえて居住環境を変えることを望まない。「京都ソリデール」を選択するのは、現在の居住環境や暮らし方を変えたいという気持ちや欲求が根底にあると考えられる。また、家族以外の人と同居することは、大なり小なり挑戦的な気持ちで住まい方を選択する行動ともいえる。

そこでヒアリングで挙げた動機と効果について人間の行動・心理分析理論である「マズローの欲求段階説」

注10)を援用して整理した（表 3-1）。「マズローの欲求段階説」では、人間は自分の成長を目指して行動するという考えの元、現在の状況に欠けていたり、改善したいことをその内容に従って「生理的欲求」「安全の欲求」「社会的欲求」「承認欲求」としてこれらを欠乏欲求（低次欲求）とし、それらが満たされた先にあるのが「自己実現の欲求」で、それを成長欲求（高次欲求）としている。

ヒアリングから得られた動機と効果は、この理論を援用して段階的に整理することができ、居住環境に欠けている条件や生活に足りないものを補いたいという不動産的な状況や居住条件の改善は「条件欲求」、生活上の不安の解消は「安心の欲求」、日常のコミュニケーションを求めることは「社会的欲求」である欠乏欲求に相当し、シニアと学生それぞれが自身の学びや生活への刺激を求めることは「自己実現の欲求」である成長欲求に相当すると判断して考察を進める。

ここで、シニア、学生双方からヒアリングで挙げられた「交流」にはいくつかのタイプがあると考えられる。「交流」による同居の効果と場の関係を考察するため、その内容と頻度から判断することで、挨拶やちょっとした声かけ、必要事項の伝達などの短時間で要件を伝える「要件交流」、食後にくつろぎながら共通の話題やそれぞれの関心事などがある程度時間をかけて話す「滞留交流」、誕生日や学生の友人を呼んだご飯パーティなど散発的に行われる「催事交流」の3種類に分けられる。シ

表 2-2. 全事例リスト

（2024年3月末時点）

世帯No.	所在地	住居形態	シニア世帯	開始年	受け入れた学生	調査No.
①	北区	戸建	単女	2017	○女-B1、○男-B4、○男-B1、○男-B3、●男-B2、●男-B1	1
②	北区	離れ	夫婦	2020	○女-B2、○女-B2、○女-B2、●女-B1、●女-B2	
③	西京区	戸建	単女	2018	○女-B1、○女-高校、○女-B1、○女-B3、○女-B1	
④	左京区	戸建	単女	2021	○女-B1、○女-B3、○女-M1、●女-M1、▲女-B3	2
⑤	左京区	戸建	夫婦	2022	○男-B1、○女-留学生、M2、○女-M1、●男-M1、▲女-B3	3
⑥	北区	戸建	夫婦	2018	○男-B1、○男-留学生、M1、○女-B1、●男-M1	4
⑦	山科区	戸建	単女	2022	○男-M1、○女-B3、○女-B1、○男-M1	5
⑧	北区	戸建	単女	2019	○男-B4、○女-B、○男-B5	
⑨	上京区	戸建	夫婦	2020	○男-M2、○女-M1、留学生、▲男-B4	6
⑩	伏見区	戸建	夫婦	2021	○女-高校、○女-高校、▲	
⑪	左京区	集住	単女	2021	○女-M1、○女-B4	7
⑫	左京区	離れ	単女	2017	○女-M1、○男-B4	
⑬	上京区	戸建	単男	2019	○女-B1、○女-M1、留学生	
⑭	左京区	戸建	単女	2018	○女-B3	
⑮	北区	戸建	夫婦	2017	○女-B1	
⑯	左京区	戸建	単女	2017	○女-B2	
⑰	上京区	戸建	単女	2019	○男-D、留学生	
⑱	西京区	戸建	夫婦	2020	○女-B1	
⑲	伏見区	戸建	夫婦	2021	○男-留学生	
⑳	左京区	集住	単男	2021	○女-B	
㉑	北区	戸建	単男	2023	○男-B1	
㉒	上京区	戸建	単女	2023	○女-B2	
㉓	右京区	戸建	単女	2021	○男-B	
㉔	福知山市	2世帯	単女	2018	○男-B2、○男-B3、○男-B3、○女-B1、▲	
㉕	福知山市	SH	夫婦	2018	○女-B2、○女-高校、○女-B3、○女-B2、○男-B2、○男-B2、○男-B2、▲	
㉖	福知山市	離れ	単女	2020	○男-B2、▲	

凡例
○：同居終了、◎（調査時）同居中、
●（調査時～現在）同居中
▲同居希望中または面談中
▲実測、ヒアリング調査対象事例
（フガーベ）はヒアリングした学生
※ソリデールの同居実績は、同居した学生の数でカウントしている。

表 2-3. 性別別組み合わせ

表 2-4. 立地地域

表 2-7. 家賃

シニア	若者（人）
夫婦（28件）	女子学生 18 41.8% 男子学生 10
女性（35件）	女子学生 20 52.2% 男子学生 15
男性（4件）	女子学生 3 6.0% 男子学生 1

表 2-6. 学生の出身地

地方	件
北海道・東北	1
関東	16
東海	3
京都府内	7
関西（大阪、奈良、兵庫、滋賀）	19
中国・山陰	5
四国	3
九州・沖縄	5
海外（留学生）	6

表 2-5. 住宅形態

行政区	件
北区	19
左京区	15
上京区	7
西京区	6
山科区	4
伏見区	3
右京区	1
東山区	0
下京区	0
南区	0
福知山市	12

住宅形態	件
戸建	44
戸建（店舗併用等）	7
戸建＋離れ	13
共同住宅	3

家賃（円）	件
2万	2
2.5万未満＋水道光熱費	11
2.5万	7
2.5万＋水道光熱費	2
2.8万＋水道光熱費	3
3万	9
3万＋水道光熱費	4
3.5万	8
4万	1
4.5万＋水道光熱費	1
5万（食費込み）	2
6.5万（食費込み）	1

※福知山市と京都市では家賃平均も異なることが考えられ、家賃については京都市内に立地する事例で情報の得られた51件の集計。

ニアと学生からは、それぞれ「コミュニケーション」が増えたことが同居のメリットとして挙げられているが、ヒアリング内容から要件交流は、生活上の孤独感を解消したり交流するという行為自体に満足する「社会的欲求」に、滞留交流はそれぞれの世代による考え方やものの見方などに刺激を受けたり、様々な学びにつながるといった「自己実現の欲求」に相応すると判断できる^{注11)}。

3.2 「京都ソリデール」で同居をしようと思った動機

シニアの動機は、空き部屋を使って欲しい、部屋が余っているといった「条件欲求」、若い人や新しいコミュニケーションを求める「社会的欲求」、若い人の役に立ちたい、若い人から刺激を受けたい、若い人と住みたいという「自己実現の欲求」に整理できる。学生の動機としては、大学のそばに住める、家賃が安い、初期費用を抑える、短期間の住まいといった「条件欲求」、一人暮らしに対する不安を解消したい「安心の欲求」、コロナ禍で大学に行けないので人間関係が限られる^{注12)}といった生活空間でのコミュニケーションを求める「社会的欲求」、新しい生活に挑戦してみたい、住環境に興味があるなどの「自己実現の欲求」に整理できる。

3.3 ソリデール事業の同居で得られた効果

次に、ソリデールによる同居後の効果として、シニアは、家が片付いた、収入の足しになる、といった「条件欲求」、安心感がある、心身ともに健康になるなどの「安心の欲求」、話し相手ができる、若い人とのコミュニケー

ションなどの「社会的欲求」といった、生活環境を整えたり、生活全般に足りないと感じていた部分を補う欠乏欲求と、若い人の役に立っている、若い人から刺激を受ける、人生の幅が広がるといった「自己実現の欲求」である成長欲求が満たされている。学生は、安価な家賃、大学に近い、広い住宅に住めるという「条件欲求」も挙げられたが、その他の内容が多岐にわたっている。帰った時に灯がついていると安心、ごはんをつくってくれてほっとするといった「安心の欲求」や、「おはよう」といえる相手がいる、愚痴を聞いてくれてストレス解消になるといった「社会的欲求」など、一人暮らしでは得られないことを充足し、さらに自分の自立、シニアとの関係構築、シニアの考え方を学ぶなど、自己の成長につながる「自己実現の欲求」に達成感を得ている。

これらを同居の前後で総合的に考察すると、シニア、学生ともに、「条件欲求」、「社会的欲求」、「自己実現の欲求」といった動機からそれぞれ「京都ソリデール」を選択し、同居後は、シニア、学生共にそれぞれの「条件欲求」を満たした上で、動機ではほとんど挙げられなかった誰かがいることによる「安心」を得ることができている。さらに、生活空間の中でのコミュニケーションによる「社会的欲求」と、それぞれの世代が自身の生活に刺激や有用な学びを得る「自己実現の欲求」が満たされている。特に学生の動機では居住環境を改善する「条件欲求」が強いが、同居後には精神的な充足度が高められている。このことから、「京都ソリデール」は、住宅事情の改善や生活の質を上げだけでなく、両世代にとって精神

表 3-1. ソリデールをしようと思った動機と同居で得られた効果

欲求段階	動機と効果	シニア		若者		の欲求
		ソリデールをしようと思った動機	同居で得られた効果	ソリデールをしようと思った動機	同居で得られた効果	
成長欲求（高次欲求）	自己実現の欲求	(事例 2) 若い人から刺激を受けたい。 (事例 3) 自宅で仕事をすることになり、 新築へ移り住む際、学生と一緒に住むくらしが年取った時のくらしとして魅力を感じ、ソリデールのようなことをしてみたい。 (事例 4) 次世代を担う子たちに力を注ぎたい。 (事例 5) 子どもが早く独立したため、若い人と住みたいと思った。 (事例 6) 若い人が仕事をし貯金をする余裕を与えてあげたい。	(事例 1) 役に立っていると感じられる。 (事例 2) 若い人から刺激を受けられる。 (事例 3) 精神的に若返った気分になる。 (事例 3) 生活に彩りが増え、生活感が 出た。 (事例 3) 若い人と交流することで、人生の幅が広がる。 (事例 3) 学生と語り合う関係を築けた。 (事例 4) 若い人の感覚を知るよい機会になる。 (事例 4) 人との関わり方を覚えられる。 お互いのために意見を交換することは大事。 (事例 5) 心身ともに健康になったという実感。	(事例 4) 家を訪問したときわくわくした。 (事例 4) 何年やってみたい仕事をシニアがしていたから話を聞いてみたい。 (事例 6) 先輩から誘われ、新しい生活に挑戦してみようと思った。 (事例 7) 住環境に興味があったので、試してみようと思った。	(事例 1) シニアの話を聞ける。 (事例 2) シニアと交流して生活の知恵を得た。 (事例 2) 他人の生活を知ることができて面白い。 (事例 2) 自分の自立を感じられた。 (事例 4) いろいろなことを教えてもらい、学びにつながった。 (事例 4) シニアとの交流が楽しい経験だった。 (事例 4) 自分の家のような感覚がある居場所や、シニアや関係する人との関係を築けた。 (事例 4) 自分の居場所を見つける能力を高められた。 (事例 4) シニアの考え方を勉強できた。 (事例 4) 住んでいる地域と繋がることができてよかった。 (事例 4) ご近所とか自分の家だけでは新しいコミュニケーションや交流が増えた。 (事例 5) シニアと一緒に料理をする時間が楽しい。 (事例 6) 地蔵盆に参加したりすることで、仕事で WS をする際のノウハウが見についた。 (事例 7) 人生の経験値が増え、有意義な学生生活が過ごせた。 (事例 7) 話題が増えた。 (事例 7) 着付けの相談をしたら、シニアの振袖を着せてもらった。	精神的欲求
	社会的欲求	(事例 2) 夫が亡くなった後、夫婦単位のコミュニティではない新しいコミュニティを築きたい。 (事例 2) 一人暮らしが嫌だった。 (事例 3) 生活の中に学生がいることに魅力を感じた。 (事例 3) 仕事が忙しく、基地のように生活感のない家が建った。 (事例 6) 誰かを泊めることに興味があった。 (事例 7) 以前より留学生を受け入れていたが、コロナで留学生が来ないのでソリデールを始めた。	(事例 2) 若い人からデジタルについて教えられる。 (事例 6) 話し相手ができる。年寄り 2 人だと除気になるからうようよい。 (事例 7) 異世代交流ができる。	(事例 3.5) コロナ禍に一人暮らしをしていて、大学にも行けず、人とコミュニケーションが取れないことに寂しさ、苦痛を感じていた。 (事例 6) コロナ禍で大学にも行けず、人間関係が限られてしまうのがもったいない。 (事例 7) それまではシェアハウスをしていたが、思ったより住民同士のコミュニケーションがなく、生活を委ねたかった。	(事例 2) 友達ではない他人と生活することで責任が発生し、程よい緊張感で生活できた。 (事例 3) リビングにいくと毎日「おはよう」と言える相手がいるのが嬉しい。 (事例 5) 他人とコミュニケーションを深めていくのがよい。 (事例 6) 愚痴を聞いてくれて、ストレス解消になった。	
欠乏欲求（低次欲求）	安心心の欲求	(事例 1.5) 空いている部屋を使って欲しい。部屋が余っている。 (事例 3) 元々シェアハウスをしていた家を購入した。 (事例 5) 生まれ育った家を残したい。	(事例 1) セキュリティ面で安心できる。 (事例 2) 灯りのついている家に帰れる。 (事例 2) 休調面一人でいることの心配がない。 (事例 2) 戸締りなど、安心して家を出られる。 (事例 3) 将来への安心感がある。	(事例 1) 一人暮らしに不安があった。	(事例 1) ご飯を作ってくれて、一緒に食べることもあり、ほっとする。 (事例 1) 家に帰ると人がいて安心する。 (事例 3) 家に帰ったら電気がついていて、安心感がある。 (事例 5) 時々シニアがごはんを作ってくれる。 (事例 5) シニアが優しくしてくれる。 (事例 6) 帰宅後、温かい家に帰って声をかけられると心強くなった。 (事例 7) ごはんをつくってもらえて、呼んでもらえるのが実家にいるような安心感がある。 (事例 7) 一人暮らしと違い、病気になった時に気づいてもらえる。 (事例 7) 親が安心していい。	物質的欲求
	条件欲求	(事例 1.5) 空いている部屋を使って欲しい。部屋が余っている。 (事例 3) 元々シェアハウスをしていた家を購入した。 (事例 5) 生まれ育った家を残したい。	(事例 1) 掃除をよくするようになって、家が片付いた。 (事例 1) 空き部屋が無駄にならない。 (事例 2) 人が家にいることで、家の片づけがはかどる。 (事例 5) 収入の足しになる。 (事例 7) 規律のある生活ができる。ひとり暮らしだと、つい怠けてしまう。 (事例 7) 経済的援助となる。	(事例 1) 賃貸住宅の初期費用を心配していた。 (事例 2) シェアルームを解消するタイミング。 (事例 4) 金銭的な事情。 (事例 4) 課題が忙しく下宿したいが、費用が高かった。 (事例 5) 自転車を通る範囲で賃貸住宅を探していて、シェアルームを知り選択したとき、安い物件を探していた。 (事例 6) 大学院の授業が 5、6 限スタートが多く、帰宅時間が遅くなり、大学のそばに住める。 (事例 7) 短期間の住まいを探していた。	(事例 1) 家賃が安い。 (事例 1) 初期費用を抑えられたこと。 (事例 1) 雨の日にも車で送迎してくれる。 (事例 1) 部屋が広い。 (事例 3) 家賃が安い。 (事例 5) ピアノが弾ける。 (事例 7) 家賃が安い。	

凡例 ヒアリングで挙げられた件数 シニア 1～2件 3～4件 5件以上 学生 1～2件 3～4件 5件以上

的な充足感を得て、社会性を構築できる住まい方であり、特に、学生にとっては自己の将来に対して精神的な成長を促す有意義な居住経験となることを示唆している。

4. 生活スケジュールと生活上のルール、配慮

4.1 生活スケジュール

前章で示したように「京都ソリデール」について一定の効果が認められる一方で、同居に際し、それぞれの生活リズムが崩れることがないのか、どのようなストレスが生じるのかなどの懸念が残る。一般的に複数名が一つの住宅で過ごす場合、リビングやダイニング、キッチン（以下、LDK）や水廻り（洗面、浴室）といった共用で使用するスペースの使い方が課題になる。そこでまず、シニアと学生の生活スケジュールについて、学生が通学する平日を標準的なスケジュールとし^{注13)}、時間を縦軸にした記入表に、行為とそれを行う場所を書き込んでもらったデータを整理した（図4-1）。これをみると、事例別に少しずつ時間がずれたり、学生によって外出時間の長短はあるものの、標準的な生活スケジュールは、「就寝（個

室）」、「朝食（LDK）」、「在宅（LD、個室）/大学（外出）」、「夕食+団らん（LDK）」、「就寝前（個室）」に大別できる。

起床はシニアの方が早いけどほとんど同じ時間帯で、その後個室で過ごすかLDに来て朝食をとるが、学生は朝食後大学に行くため滞在時間は短く、シニアは朝食後もLDで過ごすことが多い。シニアは日中、外出したり庭で過ごすこともあるが、どのシニアもLDKで過ごす時間が比較的長い。夕方になると、シニアは学生の帰宅時間に配慮して、キッチンを使用する時間が被らないように夕食の準備を始める。その後学生が帰宅する前に夕食をとったり、日によっては一緒に夕食を食べる。シニアは夕食後もLDでくつろいでいるため、学生の夕食時や食後1～2時間ほどおしゃべりをしたり、テレビや動画を一緒に観る。その後は、それぞれ入浴し、個室に戻り就寝する。3章で述べた日常的な交流（要件交流と滞留交流）が発生するのは、朝食時と夕食時だが、朝食時は学生は急いでいるため予定の確認や天気などの簡単な話題（要件交流）が多いが、夕食時は食後も1～2時間双方がLDKで過ごし、そこでいろいろな話題でおしゃべりをすること

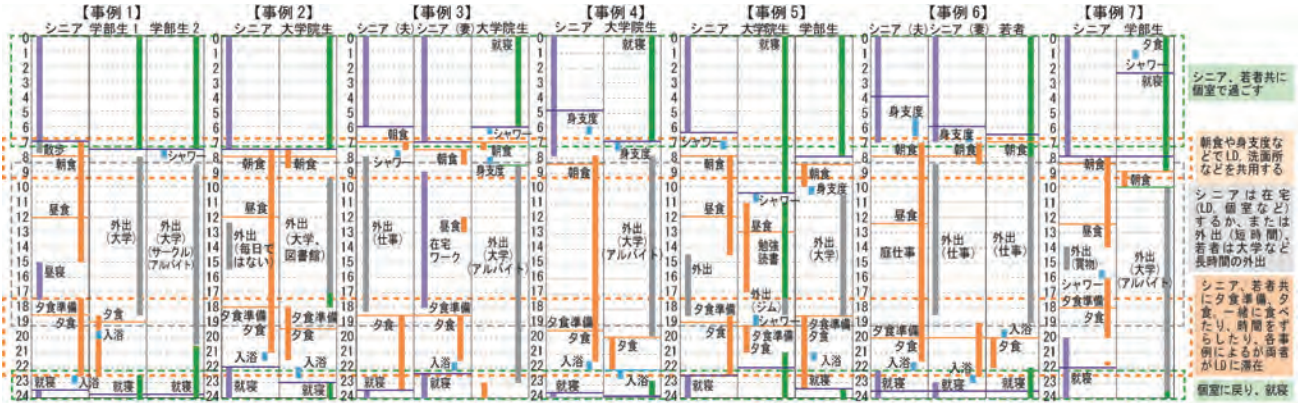


図 4-1. 代表的な平日の生活スケジュール

表 4-1. 住まい方のルールと配慮

	ルール（シニアと学生の両者が守る）	生活上の配慮、困ったこと（シニア）	生活上の配慮、困ったこと（学生）
食事（LD / 台所）	（事例1 2.3.7）基本的に料理は各自です。 （事例1）食器は食洗器に入れ、いっしょになったら機械を回す。 （事例1）食洗器に入らない分は使った人が片付ける。 （事例1 2.5.7）冷蔵庫は段を分けて使う。 （事例2）生ごみはコンポストに入れる。 （事例3）お酒は各自で買う。 （事例3）自分の茶碗、箸、コップなどは籠にに入れて棚にしまう。 （事例4）冷蔵庫の材料は自由に使う。 （事例4）夕食はシニアが作る。 （事例5）食器は置きっぱなしにしないですぐ洗う。 （事例7）スペースの問題で、茶碗、コップ以外の調理器具（自分が使っていたもの）はキッチンに置かない。	（事例1）炊飯器にあるご飯は自由に食べてよい。 （事例1）食器は食洗器に入れる。 （事例2）帰宅時間を聞いて、台所を使う時間が被らないようにする。 （事例5）おかずを多く作って置いて、食事の時間が被った時には提供している。 （事例7）お箸は学生の名前を彫ったものを注文する。	（事例4.6.7）ご飯と一緒に食べた時には、食事後の皿洗いをする。 （事例5）次の人のことを考えて、キッチンをきれいにする。 （事例1）消耗品が切れているのに気づいたら買い足している。 （事例1）自分の洗濯物は自分の部屋で干す。 （事例1）トイレをきれいに使う。 （事例6）専用のトイレ、玄関を使用する。 （事例2）髪が長いので、ドライヤーは個室でかける。 （事例1.3.5）シニアや他の学生と洗面所や浴室を利用する時間がかぶらないように調整する。 （事例4）2階のトイレを使用する。 （事例4）歯磨きは2階のミニキッチンでする。 （事例4）電気を消し忘れないように気をつけている。 （事例5）お風呂場は掃除してでる。換気のために窓を開けて出る。 （事例6）帰宅後にすぐ入浴する。 （事例6）日付をまたいだら入浴はしない。 （事例7）洗面所などに掃除機をかける。 （事例7）トイレ掃除をする。
洗面・入浴	（事例1 3.5.7）洗濯機は各自で回す。 （事例2、4.6）洗濯はシニアがする。または洗濯機はできる方が一緒に回す。 （事例2.4）最後に入浴した人が掃除する。 （事例4）入浴時、お湯、洗剤を使いすぎない。 （事例5）お風呂は、週4日湯かす。それ以外は銭湯へ行く。 （事例5）お風呂は居住者全員で交代で掃除する。	（事例1）バスチェック、生ごみはシニアが捨てる。 （事例2）ごみ捨てをすることが多い。 （事例6）不在時に若者の部屋の掃除をする。 （事例3）洗面所を利用したいときは浴室に人がいないかを確認してから使う。 （事例7）歯磨きは台所でする。 （事例7）入浴は髪間にする（帰宅後すぐ）。	（事例1）玄関で靴をそろえる。 （事例1）共用部に私物を広げない。 （事例5）共用の廊下の掃除をする。 （事例7）ゴミが重いときは下まで捨てに行く。 （事例3）遅くなる時や外泊時は連絡する。 （事例6.7）出かけるときは個室のドアを開けておく。 （事例6.7）帰宅時、出かけるときは声をかける。
清掃・ごみ捨て等	（事例1）学生が使用する部分は学生同士で管理する。 （事例1.3）各自の部屋は自分で掃除する。 （事例1.5.7）共用部のゴミはシニアが捨てる。 （事例2）ごみは気づいた人が捨てる。またはできる人が捨てる。 （事例2）生ごみはコンポストに捨てる。 （事例1 3.4.5.6.7）燃えるごみは各自で捨てる。缶、瓶は一緒に出す。 （事例4.5）電気はつけっぱなしにしない。 （事例7）玄関が狭いので靴箱は分けて使う。	（事例1）バスチェック、生ごみはシニアが捨てる。 （事例2）ごみ捨てをすることが多い。 （事例6）不在時に若者の部屋の掃除をする。 （事例3）洗面所を利用したいときは浴室に人がいないかを確認してから使う。 （事例7）歯磨きは台所でする。 （事例7）入浴は髪間にする（帰宅後すぐ）。	（事例1）玄関で靴をそろえる。 （事例1）共用部に私物を広げない。 （事例5）共用の廊下の掃除をする。 （事例7）ゴミが重いときは下まで捨てに行く。 （事例3）遅くなる時や外泊時は連絡する。 （事例6.7）出かけるときは個室のドアを開けておく。 （事例6.7）帰宅時、出かけるときは声をかける。
在・不在、連絡等	（事例1 2.5.6）帰りが遅くなる時、外泊時は連絡する。 （事例3）玄関に名札を付けて在・不在を知らせる。 （事例3）鍵を泊めるときは事前に伝える。 （事例4）門限はなし。 （事例4.5）スリッパで在・不在の確認。 （事例6）外出時は部屋の扉を開けておく。 （事例6）仕事のシフト表をリビングに貼る。 （事例7）夕食の有無はカレンダーに書き込む。 （事例7）帰宅が遅くなったときは食事は自分の部屋で食べる。	（事例1）誕生日にご飯を作って、一緒に食べるようにしている。 （事例1）つい若い人のことを気にかけてしまう。 （事例1）雨の日は駅まで送迎してあげることもある。 （事例1 2.5）個室には入らない。 （事例2）コミュニケーションに困った時期があった。 （事例4）互いの生活に合わせた努力を無意識にしている（よい意味で）。 （事例4）暮らしの中で互いに適度な距離感をとるようになっている。 （事例7）家の中で会った声をかける。	（事例1 2.4.5.6）動画を観る際の音量や生活音、足音に気をつける。 （事例6）シニアがいないときは、音を立てて動画などを観ていた。 （事例4）音でだれがどこにいるのかを把握するようにしていた。 （事例5）ピアノの演奏は19時までとする。 （事例6）玄関の電気がついていないときは物音にたてないようにした。 （事例7）シニアが個室に戻って寝るときは、自室に戻った。
その他	（事例1 2.3.4.5.6.7）お互いの生活は干渉しない。 （事例2）共同で使う消耗品は折半する。 （事例4）ルールはないが、住んでいる間にほしいことは言い合える関係になるのがよい。	（事例1 4）大学までの距離が遠い。 （事例2）シニアの個室がある2階にはいかない。 （事例4.6）1階なので蚊に刺される。ムシが多い。 （事例4.5）冬の寒さ、部屋が通らない。 （事例4）リビングや出かける（玄関に行く）タイミングに気がつかなかった。 （事例6）友達を呼ばない。 （事例6）誰かいるのといないの気持ち（緊張感）が変わった。 （事例6）話すことがない日はリビングにはいかない。 （事例7）シニアの家族との関係がうまくいかなかった。	（事例1 4）大学までの距離が遠い。 （事例2）シニアの個室がある2階にはいかない。 （事例4.6）1階なので蚊に刺される。ムシが多い。 （事例4.5）冬の寒さ、部屋が通らない。 （事例4）リビングや出かける（玄関に行く）タイミングに気がつかなかった。 （事例6）友達を呼ばない。 （事例6）誰かいるのといないの気持ち（緊張感）が変わった。 （事例6）話すことがない日はリビングにはいかない。 （事例7）シニアの家族との関係がうまくいかなかった。

(滞留交流)で情報交換や異なる世代の考え方などを知り、互いへの理解も深まっていると考えられる。

洗面や浴室の水廻りについては、ほとんどの事例で夕食後、順番に入浴しているが、事例6では若者^{注14)}が帰宅後すぐに入浴し夕食後にシニアが入浴する、事例7ではシニアは夕食前や帰宅後すぐにシャワーを使用するなど、時間に余裕のあるシニアが浴室の使用時間を調整している。起床後にシャワーを使用する事例3と事例5では、同居を始めたころには同居人同士でシャワーの使用時間が重なることがあり、互いにストレスを抱えることもあったが、次第に互いの生活パターンにあわせて自身のスケジュールを調整し、その後は快適に過している。

このことから、多少の調整は必要になるが生活全般においては、お互いの生活を邪魔することなく、同居前と変わらないスケジュールで双方が独立した生活を送ることができており、同居前に互いの生活スケジュールについてある程度相談することで、このような心理的な負担を軽減することができる。

4.2 住まい方のルールと配慮

次に、シニアと学生がお互いを守る生活上の決まりを「ルール」^{注15)}とし、決まりではないがお互いを尊重し快適に過ごすための気遣いを「配慮」として、ヒアリング内容を整理した(表4-1)。「ルール」「配慮」とともに、食事(LDK)、洗面・入浴(洗面所、浴室)、清掃・ごみ捨て、在・不在の把握、生活音などのその他に分類することができた。

これらは、一般的なシェアハウスなどでみられるような共同生活で想定される内容の他に、「シニアのホーム」に同居するという「異世代ホームシェア」ならではの内容がみられた。例えば、「缶・瓶ごみはシニアがまとめて出す」、「洗濯はまとめて一緒に回す」、「風呂は週4日沸かし、それ以外は銭湯へ行く」など、同居前からのシニアの生活習慣や地域の決まりに倣ったルールや、在宅か不在かが互いにわかるような表示の仕方、学生の夕食の有無、帰宅が遅くなる時や外泊するときは事前にシニアに連絡する、などシニアが学生のことを心配しないようなルールが特徴として挙げられる。

「配慮」としては、シニアは学生の生活を尊重しながらも、食事と日常のコミュニケーションの取り方に気を配っている。一方学生からは、水廻りの使い方(汚さないように気をつける、掃除をするなど)、足音や水廻りを使用する時の生活音、動画を観るときの音量への配慮など、シニアの住空間を大切にするという意識と、生活を邪魔しないような配慮がみられた。

基本的には同居をしてからも最小限のルールで、お互いの生活スケジュールや生活領域を干渉することなく同居しやすい状況を整えている一方で、同居の場所がシニ

アの自宅であり、学生はシニアの生活を乱さないような配慮や適度な距離感を保ちながら生活する、という「異世代ホームシェア」らしい生活の工夫を把握した。

5. 次世代下宿「京都ソリデール」事業における住まい方

5.1 共用スペースの使い方

本章では、7事例に関する間取り調査(図5-1, 5-2)と住まい方のヒアリングをあわせて検討し、住まい方の特徴について考察する。

住まい方のヒアリングから、シニアと学生が共用するのは、ダイニング(以下D)、リビング(以下L)、キッチン(以下K)、水廻り(洗面、浴室)、外部空間である。

LDKの他に、共用スペースとして和室(客間)やアトリエなどがある事例もある。共用スペースの平均面積は44.37㎡だが、15~30㎡程度の事例(No. 2, 3, 6, 7)と、LDK以外に和室などがある60㎡以上の事例(No. 1, 4, 5)に大別される。共用スペースは、主に朝食、夕食時はシニア、学生双方が利用する。夕食後はシニアと学生がLDで一緒に過ごす、和室やアトリエなどの共用スペースがある事例では、学生は読書や考えごと、スマホを観たりするのに、すぐには個室に籠らないで、シニアと適度に距離を保ちながらLDとは別の共用スペースで過ごすこともある。一方で、学生の個室から玄関へ行くのにLDKを通る場合、急いで出かけた素振りをするなどでLDで過ごしているシニアが話しかけにくい雰囲気を作ったり、疲れて帰ってきた際にシニアと話す気持ちの余裕がないときにわざと素っ気なくして話しかけにくくするなどの気遣いをしている学生もいた。

また、水廻りについては、学生の個室から水廻りに行くときにシニアの部屋の前を通る(事例3, 6)、水廻りがシニアの部屋の近くの場合(事例6)、学生は夜遅く帰宅した後に、自室でドライヤーをかけたり、日付をまたぐ場合は浴室を使用しない、などの配慮が挙げられた。

一般的に共用スペースには、同じ場所を同じ時間に共用するものと、同じ場所を違う時間に共用するものがある。「京都ソリデール」の場合、前者はシニアの居場所でもあり学生との交流の場でもあるLDへの関わり方が、後者は夜遅い時間に使用することが考えられる水廻りが相当し、シニアの個室と学生の個室の位置が関係することを示唆しており、次節以降でこの点を検討する。

5.2 シニアと学生の個室の使い方

まず、間取り図をもとに確認した個室の特徴を表5-1、図5-3に示す。まずそれぞれの個室の面積では、シニアの個室の平均は13.73㎡、学生の個室は16.15㎡(9~10畳程度、収納含む)でシニアの個室より若干広く、その他にLDや洗面なども充実しているため、一人暮らし用の

【事例1】

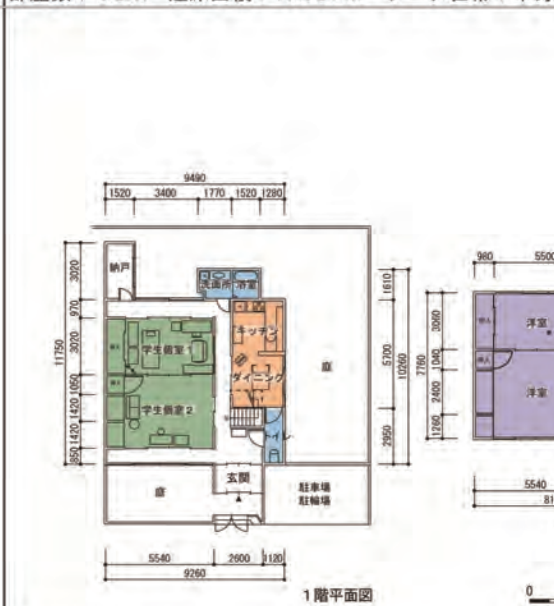
住所：京都市北区 住居形態：2階戸建
部屋数：5LDK 延床面積：187.9㎡ シニア世帯：単身



- (1) 住宅の南側と東側に通りに面する閑静な住宅街に位置し、前面道路に面した門をくぐり、玄関にアプローチする。自転車は門と玄関の間に置かれる。
- (2) 以前はシニア、夫、父、義母と住み、義母が1階のシニア個室、父が学生個室2、夫が学生個室1を使用していた。夫、父、義母が逝去したのを契機に空きができ、学生の受け入れを決める。ソリデール開始時にはもともと学生個室1の奥にあった納戸に、階段から直接アクセスすることができるようにするため、壁を新たに設置し、廊下を設ける改修を行った。
- (3) 普段は交流を行う時間を特別に設けてはいないが、シニアは学生のために白ごはんを毎日用意し、間接的な交流が行われている。シニアと学生が共に共用スペースにいる場合はおしゃべりをして過ごすこともある。
- (4) シニアの個室は1階、学生の個室は2階にあり、階で居住空間を分けている。2階へ上がる階段は共用スペースを通らずに玄関から直接アプローチすることができる。学生個室には山を望む東向きの窓がある。学生は基本的には個室で過ごすことが多いが、縁側のある1階和室で勉強をする学生もいる。学生は大学まで自転車で通学している。

【事例2】

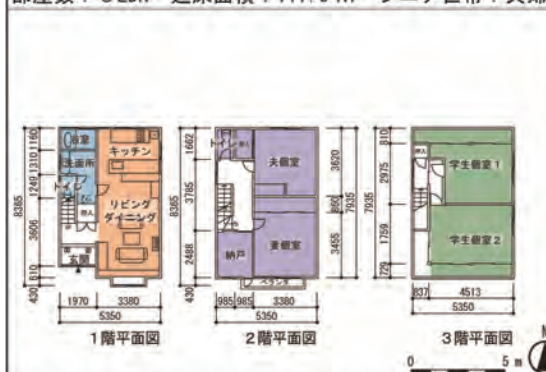
住所：京都市左京区 住居形態：2階戸建
部屋数：6LDK 延床面積：160.24㎡ シニア世帯：単身



- (1) 住宅の南側に通りに面する閑静な住宅街に位置している。前面道路に面した門をくぐり、玄関にアプローチする。自転車は門の東側にある駐車場、駐輪場に置かれている。
- (2) 住宅はシニアの夫が子供の頃に義母が購入し、シニアは結婚以来、住み続けている。以前は義母と暮らしていた。義母、夫が逝去したことを契機に、夫婦単位の人間関係ではない新しいコミュニティをつくりたいと考え、ソリデールを開始する。それ以前は1階の学生個室2は仏間や客間として使用され、学生個室1は義母の個室だった。ソリデール開始を決めたことから、学生に部屋を貸し出せるように1階の部屋の整理を行った。
- (3) 交流を行う時間を特別に設けてはいないが、学生がダイニングで勉強をすることもあり、食事の時間に加えて、共用スペースにシニアと学生がいる場合には自然な交流が生まれている。
- (4) シニアの個室と作業部屋は2階、学生の個室は1階にあり、階でシニアと学生の居住空間が分けられている。そのため学生が2階へ上がることはほとんどない。学生個室2と学生個室1は横で仕切られ、それぞれ押入が設けられている。また学生個室2は庭に面し、採光が充分にある。学生は大学まで自転車や徒歩で通学している。

【事例3】

住所：京都市左京区 住居形態：3階戸建
部屋数：6LDK 延床面積：117.9㎡ シニア世帯：夫婦



- (1) 住宅の南側に通りに面する住宅地に位置する。東側には大通りがあり、商店などが建ち並ぶエリアにも近い。自転車は玄関前に置かれる。
- (2) ソリデール事業のことを知り、学生を受け入れられるような住宅を探す中で、元々シェアハウスとして使われていた住宅を見つけ、2021年に購入する。ソリデール開始にあたって、改修は行っていない。
- (3) 交流を行う時間は特別に設けてはいないが、水廻りを使用する際に共用スペースであるリビング・ダイニングを通るため、居合わせた場合には挨拶やおしゃべりをすることもある。玄関には在室か外出中を示す札がある。
- (4) 共用スペースは1階、シニア個室は2階、学生個室は3階と階で居住空間が分けられている。学生は共用スペースを通らずに、個室に向かう階段にアプローチすることができる。学生個室の東側に窓が設けられ、採光は充分に採れる。学生は大学まで自転車で通学している。

【事例5】

住所：京都市山科区 住居形態：3階戸建
部屋数：6DK 延床面積：226.52㎡ シニア世帯：単身



- (1) 住宅の北側に通りに面して住宅が建ち並ぶエリアに位置している。通りと玄関の間には植木鉢などが置かれたカーポートがある。
- (2) 住宅はシニアの父が家族と住むために設計し、シニアは以来、住み続けている。父は設計時に、子供が巣立った後に2、3階を学生に貸すことを想定していた。3階の学生個室は以前は子供部屋として使用されていた。1階のアトリエにはアップライトピアノとテーブルが置いてあり、シニアの作業場や学生の勉強場所として利用されている。
- (3) 食事は基本的には各自で用意し、交流をする時間を特別に設けてはいないが、夕食の準備やおすそわけをもらったときには共食し、交流が行われている。
- (4) 共用スペースは1階アトリエ、2階ダイニング、キッチン、和室であり、2階にシニアの個室、3階に学生個室が3室ある。学生は勉強や読書をする際に自室だけではなくアトリエを利用することもある。アトリエにはピアノがあり、学生が演奏するなど、キッチン・ダイニング以外の共用スペースが学生の過ごす場所として機能している。また3階にはバルコニーがあり、洗濯ものを外干しできるスペースが確保されている。学生は大学まで自転車やバスで通学している。

【凡例】 平面図は全て1/400で作成。

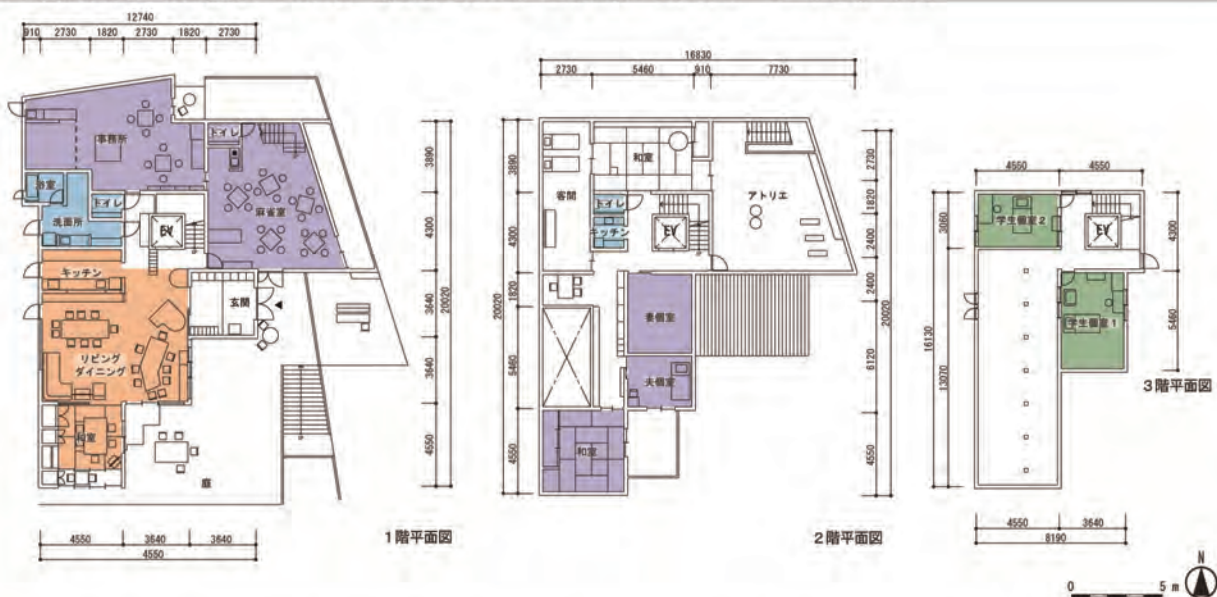
(1) 周辺環境 (2) 住宅の来歴 (3) シニアと学生の交流 (4) 学生の住環境

共用スペース シニアの専用スペース 学生の専用スペース 水廻り

図5-1. 調査事例個別詳細1

【事例4】

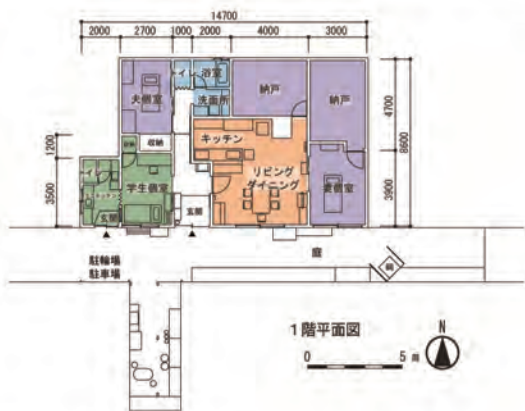
住所：京都市北区 住居形態：3階戸建 部屋数：12LD2K 延床面積：556.93㎡ シニア世帯：夫婦



- (1) 南側が道路に面している。前面道路と住宅との間に高低差があり、外階段を登って玄関にアプローチする。玄関の南側にはテーブルと椅子が置いてある庭がある。
- (2) デザイナーである妻の仕事場兼住宅として、妻、夫、息子、夫の母、そして将来の孫と一緒に住むことを想定し、妻が設計を行い、約30年前に建てられた。1階の旧事務所はかつて妻の作業場として使用され、2階のアトリエにはその作品が並べられていた。3階の学生個室1は息子がかつて使用していた部屋である。グランドピアノがある1階リビング、ダイニングでは「歌声喫茶」、1階麻雀室では「麻雀教室」、1階庭では「朝のラジオ体操」が定期的に開催されており、ソリデール開始以前から住み開きが行われていた。また妻の仕事のお手伝いとして従業員を住ませることも、ホームステイの学生を受け入れるなど、ソリデール事業で学生を受け入れる以前から家族以外の人の同居を実施している。
- (3) シニアが夕食をつくって一緒に食べる習慣があり、食事の際に交流が行われている。また、朝食・昼食もシニアと学生が共に家にいる場合は食事をするかどうか尋ね、一緒に食べることもある。「歌声喫茶」、「麻雀教室」、「朝のラジオ体操」には学生が参加することもあり、地域の大人や子供にも学生が住んでいることが認識されている。
- (4) 2階に夫婦のそれぞれの個室、3階に学生個室が2室あり、階で居住空間が分けられている。3階の学生個室1には天窓があり、昼間は照明がなくても明るい空間で、学生個室2の窓からは裏の山の風景を眺めることができる。また学生は自身の個室以外にも共有スペースであるリビング、ダイニングで過ごすこともある。学生は大学まで原付バイクや自転車で通学している。

【事例6】

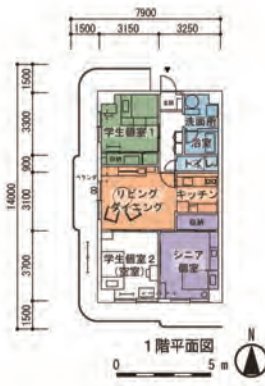
住所：京都市上京区 住居形態：平屋戸建
部屋数：5LD2K 延床面積：116.22㎡ シニア世帯：夫婦



- (1) 住宅は路地奥に建ち、西側には別の住宅が道路に面して建っている。庭には夫の趣味でつくったテーブルやゴミ箱が並び、園芸の花壇が並び、南側に飛び出た敷地には乾燥機、テーブル、椅子が置かれ、くつろげるスペースとなっている。庭に祠があり、8月には、南側に飛び出た敷地と路地全体が地蔵盆の会場となる。路地は駐輪場、駐車場としても利用されている。
- (2) 東側の学生個室は元々妻の父の部屋であったが、父が逝去し、夫が個人事業を始めると同時に事務所として使用されていた。事務所時代に洋室にしていたが、夫が仕事をやめるとともに、事務所の玄関と給湯部分は残し、個室部分を和室へ改修している。
- (3) シニアと学生の食事は基本的に別であるが、夕食を共にし、交流を行うことがある。夫の趣味である園芸に学生も参加し、共に楽しむこともある。月に1回リビング、ダイニングで実施しているカフェでは学生も手伝いを行い、地域との交流が行われている。シニアと学生の玄関は別であるが、学生は帰宅時に共有スペースに寄って、挨拶をするように心がけている。
- (4) 学生個室には独立した玄関、トイレ、ミニキッチンがあり、シニアの居住空間からは独立している。学生は共有スペースに面する学生個室の東側の襖を開け閉めすることで夫婦に在／不在がわかるように工夫をしている。学生は大学まで自転車通勤している。

【事例7】

住所：京都市左京区 住居形態：集合住宅
部屋数：3LDK 延床面積：70.40㎡ シニア世帯：単身



- (1) 集合住宅の角部屋に位置し、南側は大通りに面している。8月の送り火の際には五山の送り火を一望することができ、隣近所のマンションの住民も送り火を見に来る。
- (2) マンションの入居の募集があった際に入居し、以来、シニアは約40年間住み続けている。夫の逝去とともに一人暮らしになったため、かつて子供部屋であった北側の個室をホームステイの学生を受け入れる部屋として活用していた。しかし、コロナのため留学生が渡日できなくなったことを契機に、ソリデール事業として学生の受け入れをはじめた。
- (3) 夕食を共にする習慣があり、食事の有無の確認が月や日ごとに行われ、食事をきかけとした交流を行う。食事以外にもリビング・ダイニングで過ごす際にはおしゃべりをすることもある。来泊者や訪問客がある際には、夕食やおしゃべりに学生も参加することがある。
- (4) 学生個室1と水廻りは玄関を入ってすぐの場所に位置し、集合住宅でありながら、シニアと学生が共に独立した居住空間を持つことができている。学生個室2に学生を受け入れる準備はしてあるが、学生を実際に受け入れたことはなく、普段は空室で、来客時に客間として利用されている。学生個室1にはクローゼットが設けられている。リビング、ダイニングと廊下の間にはガラス付ドアがあり、リビング、ダイニングにいても人の出入りを感じることができる。学生は大学まで自転車通勤している。

図5-2. 調査事例個別詳細2

賃貸住居に比べても居住環境は充実しているといえる。

学生の個室は、元の子ども部屋や客間、シニアの親の部屋などが活用されており、いずれも空き部屋が使用頻度がかなり低い部屋を学生に提供している^{注16)}。また、基本的にベッド、本棚、机は揃っており、この他に衣類用ハンガー、クローゼット、ソファなどがある場合もあり、学生は家具や設備機器（エアコン、洗濯機、冷蔵庫など）を新しく揃える必要がなく、同居を始めやすいことが「京都ソリデール」の利点といえる。

身体的負担を考えるとシニアの個室はLDKと同じ階にあるのが望ましいが^{注17)}、4章で示したように、学生は生活音に配慮して生活しており、学生の立場からはLDKに隣接していない方が望ましい。調査した事例では、シニアの個室がLDKと同じ階でかつLDに隣接している場合、「遅くなったら夕食は自室で食べる」（事例7）といったルールや、「シニアが（就寝するために）個室に戻ったら、自分も個室に戻る」（事例6、7）という配慮から、シニアの生活に合わせて学生は個室に戻らざるを得ない状況もみられ、シニアの個室はLDと同じ階でも、LDには隣接していないというのが望ましい。

5.3 学生個室からの動線の独立とLDへの選択的動線

これまでみてきたように、シニアと学生はお互いの生

活スケジュールを尊重しながら、過度に干渉せず、適度な距離感で生活している一方で、「京都ソリデール」ではシニアの「ホーム」に学生が「居候」するため、シニアの「困ったこと」は少数なのに対し、学生はシニアの日常へのストレスにならないよう大なり小なり配慮しながら生活しており、ここでは学生の心理的な負担を抑えられるような動線計画を検討する。

まず、学生の生活動線として、個室から玄関、水廻りへの動線とLD、シニアの個室との位置関係を確認した（表5-2）。その際、シニアは朝食後から日中はLDにいる時間帯が長いこと、21～22時頃には個室に戻ることを考慮した。今回調査した事例は、学生の個室からシニアの個室、LDを通らないで水廻りと玄関に行ける「全て独立した動線が確保されている」（事例1、2、5、7）、水廻りに行く際にシニアの個室の前を通る（事例6）、玄関と水廻りに行くのにシニアの個室の前は通らないがLDを通る（事例4）、玄関と水廻りに行くのにシニアの個室の前を通り、水廻りに行く際にLDを通る（事例3）、に分類できた。これまで示したように、学生は特に夜遅い時間帯の生活音などに配慮している（表3-1）ことから、学生の個室から玄関、水廻りへの動線はシニアの個室の前やLDを通らない動線が確保できるのが望ましい。

また、4章で示したように「京都ソリデール」による

表 5-1. 各住宅の規模と共用スペース、個室の特徴

No	階構成	延床面積 (㎡)	共用部分 (㎡、階)		平均: 44.37 ㎡	外部空間 場所	シニアの個室 (㎡、階) 平均: 13.73 ㎡			学生の個室 (㎡、元の用途) 平均: 16.15 ㎡		
			LDK	その他			妻の部屋	夫の部屋	LDKとの関係	個室1	個室2	個室3
1	2階建	187.9	34.38(1階)	29.32(和室)	63.70	中庭、庭、駐輪場	23.01(1階)	—	同じ階	19.76(シニア夫妻の部屋)	20.70(父の部屋)	—
2	2階建	160.2	16.24(1階)	—	16.24	庭、駐輪場	7.54(2階)	—	LDKは1階	16.73(シニア義母の部屋)	21.55(客間)	—
3	3階建	117.9	26.82(1階)	—	26.82	ベランダ	14.58(2階)	12.23(2階)	LDKは1階	16.50(個室)	20.82(個室)	—
4	3階建	556.9	69.59(1階)	20.58(和室)	90.17	庭、駐車場	20.70(2階)	10.56(2階)	LDKは1階	19.87(子供部屋)	13.92(空き部屋)	—
5	3階建	226.5	27.10(2階)	14.10(和室), 23.32(アトリエ)	64.52	バルコニー	12.94(2階)	—	同じ階	13.64(子供部屋)	13.64(空き部屋)	14.67(客間)
6	平屋	116.2	30.30(1階)	—	30.30	路地	12.90(1階)	10.82(1階)	同じ階	9.45(事務所)	—	—
7	平屋	70.4	18.82	—	18.82	ベランダ	12.03(1階)	—	同じ階	11.65(子供部屋の勉強部屋)	13.23(子供部屋)	—



図 5-3. 各住宅の共用スペース、個室

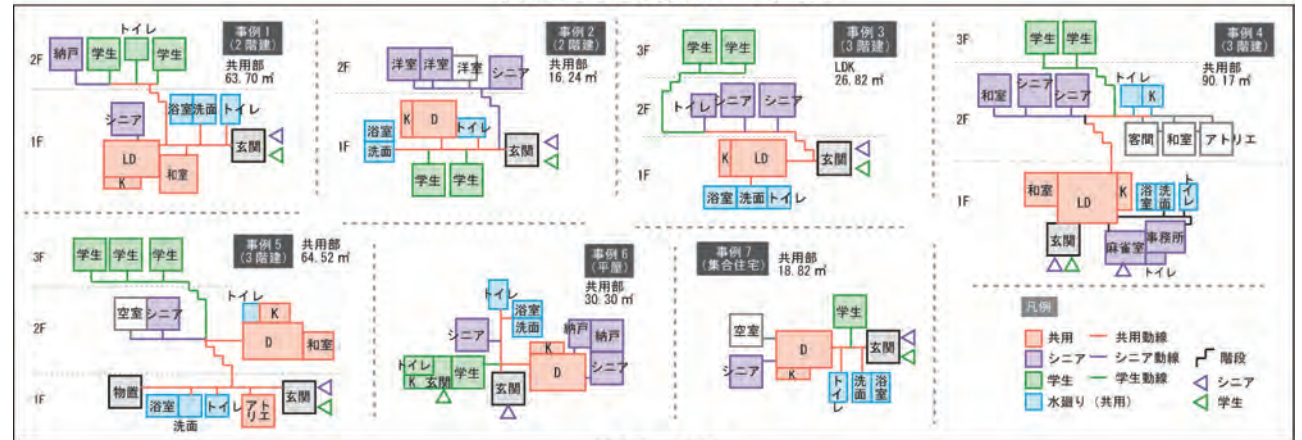


図 5-4. 動線図

同居では日常的な要件交流と滞留交流が期待でき、要件交流はLDの他に廊下や玄関などの動線上でも起こるが、同居の効果として認められる「自己実現の欲求」の達成につながる滞留交流は、シニアが多くの時間を過ごしているLDに学生が立ち寄る形で実現すると考えられる。

一方、家族でない他者が同居するため、同じ部屋に人が居れば気を遣うこともあり、学生にとってはシニアの居場所であるLDに行くことは、交流することを潜在的に「覚悟（意識）」して立ち寄っていると考えられる。夕食時にはシニアと交流することは想定している「交流」となるが、急いで出かけたい、水廻りを利用したいなどの目的を優先したいときは、できればLDを通らないのが望ましい。シニアと学生は「対等」であるといいつつも、シニアの「ホーム」に学生が「居候」するという立場関係が前提のため、学生が「滞留して交流する」、つまり学生がLDへ立ち寄ることを「選択」できる動線（選択的動線）が確保されていること、もしくはそのような動線となる位置の部屋を学生の個室にするのが望ましいと考えられる（図5-5）。

またこのことより、「異世代ホームシェア」をしやすい住宅として「戸建」「広い」という条件よりは、学生の動線の独立性が確保される事が双方の生活への負担を軽減するという点においては重要であり、玄関から廊下を介して各居室にいたる「nLDK」型の間取りは「異世代ホームシェア」をしやすく、この点で「nLDK」型の間取りが多くみられる集合住宅を「異世代ホームシェア」に適さないと判断するのは早計であることを示唆している。

また最後に、今回調査した事例のなかで学生の動線の独立性が確保されていない事例でも、家具配置を変更したり、動線が確保できるように部分的な改修で、十分改善が可能であることは指摘しておきたい。

6. まとめ

本研究では、「異世代ホームシェア」の事例として「次世代下宿『京都ソリデール』事業」の実績を整理し、住

表 5-2. 学生の動線

No	玄関へ行く シニアの 個室	水廻りへ行く LD	水廻りへ行く シニアの 個室	LD	動線の独立性	延床面積 (㎡)
1	○	○	○	○	全て独立した動線が確保されている	187.9
2	○	○	○	○	全て独立した動線が確保されている	160.2
5	○	○	○	○	全て独立した動線が確保されている	226.5
7	○	○	○	○	全て独立した動線が確保されている	70.4
6	○	○	△	○	水廻りに行く際にシニアの個室の前を通る	116.2
4	○	×	○	×	玄関、水廻りに行く際にLDを通る	556.9
3	×	○	×	×	玄関、水廻りに行く際にシニアの個室前を通る、 水廻りに行く際にLDを通る	117.9

学生はシニアの個室の前を通らず、かつLDへの選択的動線がある

学生がシニアの個室の前を通り、かつLDへの選択的動線がない

凡例

学生

シニア

水廻り

LD

玄関

共有動線

要件交流の起こる範囲

滞留交流の起こる範囲

図 5-5. 動線の独立とLDへの選択的動線

まい方のヒアリングと間取り調査から以下の知見を得た。

- ①「京都ソリデール」は、シニア、学生共にそれぞれの生活環境に求める「条件欲求」を満たした上で、「安心の欲求」と日常的な交流による「社会的欲求」が充足され、さらに世代を超えた有用な学びを得られるという「自己実現の欲求」を達成することができる住まい方となっている。特に学生にとっては、将来的な自己の成長につながる有意義な居住経験となっている。
- ②シニア、学生双方が互いを尊重し、最小限のルールで同居前と変わらない生活を送っているが、シニアの自宅に同居するという立場上、学生はシニアの生活を乱さないように水廻りの使い方や生活音に配慮している。
- ③学生にとっては、自分のスケジュールや気分に応じてシニアとLDで「滞留交流」をすることを選択できる「選択的動線」と、学生の個室から共用スペースへの独立した動線が確保されることが望ましい。

本研究で得られた「次世代下宿『京都ソリデール』事業」における住まい方は、「異世代ホームシェア」が全国的に増加しつつある現状に対し、住宅計画という面では一定の知見を得ることができたと考える。一方で、高齢者と学生という年の離れた「隔世的な異世代」という視点での考察や、学生が2人以上同居した場合のコミュニケーションのあり方などは今後の課題である。本研究の成果は、大量の不動産ストックになっている「nLDK」型の住宅を発展的に活用ための一助にもなると考える。

<謝辞>

本研究に際し、ヒアリング調査にご協力いただいたシニア、学生の皆様には感謝申し上げます。また、事業主である京都府建設交通部住宅課計画係和田由美子様、番場豊様、マッチング事業者であるNPOくらしコープ桜井郁子様、棕平芳智様、株式会社Localize 庄田健助様には、情報提供、ヒアリング調査にご協力いただき、ここに謝意を表します。

<注>

- 1)「京都府地域創生戦略」は、京都の歴史と伝統、大学や研究機関が多数存在していること、豊かな自然環境などの魅力を活かして、「人づくりの文化の創生」「産業文化の創生」「京都ぐらし文化の創生」「地域づくり文化の創生」を目指して平成29年3月に施行された。
- 2)異世代ホームシェアの事例として、首都圏では「ひとつ屋根の下プロジェクト（NPO法人街ing本郷）」、「異世代ホームシェア（NPO法人リブ&リブ）」、「ホームシェア（NPO法人ハートウォーミング・ハウス）」、「東京リトルブレイス（東京リトルブレイス）」など、地方都市では福井市の事例として「たすかりす。（福井大学工学研究科）」がある。
- 3)事業が開始された2016年度にはマッチング事業者は京都市に登録が4社で、現在は京都市3社と福知山市1社である。本研究では、そのうち、調査にご協力いただいた3社に対し、ヒアリング調査を行った。
- 4)本研究の研究分担者でもある和田露も大学在学中には事業立ち上げ時よりサポートメンバーとして携わっている。
- 5)「共住プロジェクト」は、NPOくらしコープによる居住支援として「高齢者同士が共に住む」という発想で始められた事業だったが、「次世代下宿『京都ソリデール』事業」が

開始されることを知り、「高齢者と学生が一緒に住む」という双方にとっての居住支援事業へ移行した。

- 6) マッチング事業者と京都府は「事業推進協議会」を年に1, 2回開催して事業報告などの情報交換を行っており, 同居の感想や課題は共有している。
- 7) 件数は, 学生の居住者1人を1件としてカウントしている。例えば, 同じシニア宅で1年ごとに3人の学生が同居した場合は「3件」とカウントする。これまでのマッチングの全数としては決して多いとはいえないが, 「京都ソリデール」では単に空室を提供するのではなく, シニアと学生のマッチングやトラブルに丁寧に対応することで, 好事例を増やすことを将来的な事業の発展につながると考えており, 急いで事例を増やすことは重視していない。
- 8) パリ中心部, スペイン中心部など「異世代ホームシェア」が普及している都市部では, シニアの自宅は集合住宅が多く, 集合住宅でも異世代ホームシェアは可能である。ただ, 日本の場合, マンションの管理組合の規定や隣の住戸などに理解を得るのが難しい場合がある。
- 9) 大手不動産業者「アットホーム」のHPで公開されている京都市内の20㎡以下のマンション家賃平均は4.32万円(2025年1月末閲覧時点)である。「京都ソリデール」事業による家賃は3.5万円程度までとされており, 学生の賃貸住宅を想定した家賃の相場よりも安価となっている。
- 10) 「マズローの欲求段階説」では, 人間の欲求は「生理的欲求」, 「安全の欲求」, 「社会的欲求」, 「承認欲求」の低次欲求と, 「自己実現の欲求」という高次欲求からなり, 低次欲求が順に満たされたのちに高次欲求を満たすと説明されている。シニアと学生から挙げられた動機と効果は, 居住環境の改善, 人とのコミュニケーションによる孤独の解消など, 生活上で欠乏する部分の改善と, 自己の学びや暮らしへの刺激を求める成長欲求と判断でき, 「マズローの欲求段階説」を援用可能と判断した。また著者らは, 家族以外の人に自宅の一部を開放する「開く住まい」の調査の際, 「マズローの欲求段階説」を引用して動機を分析しており, その適用性は確認済みである。
- 11) 本研究は「京都ソリデール」による同居は, 「日常生活」に安心感と豊かさをもたらす住まい方であると考えており, 催事交流は「非日常」の交流と考えるため, 今回の調査対象とはしていないが, 生活の刺激となる交流ではあることから, 今後の研究課題と考えている。また, マッチング事業者のヒアリングの際, お試し居住の際に食事会やイベントに張り切りすぎ, シニア, 学生, 双方が疲れてしまい同居にいたらなかった, という事例もあったという情報も得ている。このことは「催事交流」は生活の刺激として日常的に行うのは双方に負担が大きいのことを示唆している。
- 12) 本研究の調査期間は2022年6月～2023年12月で, 新型コロナウイルスにより大学の講義やサークル活動等の制限は解かれていたが, 新型コロナウイルスの影響により活動が大幅に制限された生活を経験した後でヒアリングを行ったため, 学生の動機の中では「コロナによる」影響は, 時期的に特徴的なものといえる。
- 13) 本研究では, 同居することの意義を日常的な生活の改善や充実を重要と考えており, 調査では, 休日のスケジュールもヒアリングしたが, まずは日常のスケジュールで共通する点を把握することを優先させたこと, 7事例で休日の過ごし方がそれぞれ異なり共通点を見出すのが難しかったことから, 本研究では学生が通学する平日を分析対象とした。
- 14) 調査時に事例6で同居している若者は調査前年度までは大学院生だったが, 卒業後も双方の同意のもとで同居を続けており, ここでは学生ではなく「若者」と表記した。
- 15) 「ルール」は同居開始時に, シニアから学生に伝えており, 学生が変わるたびに内容を更新している場合もある。
- 16) 子ども部屋が2～3部屋あった場合, 学生を2人以上受け入れることができる事例もある。今回の調査で学生が2人同居している事例では, 学生同士のコミュニケーションや

シニアとの関係性に, 1対1の関係性とは異なる質のコミュニケーションが観察されたが, 調査時に2名以上が同居しているのが2事例のみであったため, 傾向を把握するまでには至っていない。この点は今後の検討課題でもある。

- 17) シニアの個室がLDと同じ階にない事例は, 同居以前より使っていた個室をそのまま使用している, 敷地の関係でLDと同じ階にシニアの部屋が取れないなどの事情がある。事例2は2階全体がシニアの領域だが調査時は70代前半で身体的に問題がない, 事例3はシニアが50代後半で階段の昇降に問題がない, 事例4はホームエレベータがついており, 現状は生活に支障はない。

<参考文献>

- 1) 宮原真美子, 永峰麻衣子, 峠宏美:「異世代シェア居住の可能性-USAにおける高齢者-若者シェアの体験を通して-」, 住宅総合研究財団研究論文集, No. 35, pp. 239～250, 2008年版
- 2) 宮原真美子, 西出和彦:「異世代間シェア居住の可能性 - USAにおける高齢者-若者シェアの事例を通して (1) -」, 日本建築学会計画系論文集, pp. 513～520, 2011年3月
- 3) 宮原真美子, 西出和彦:「異世代間シェア居住の可能性-アメリカの事例にみる住宅を活用したコミュニティ形成に関する考察-」, 住総研研究論文集, No. 39, pp. 1～12, 2012年版
- 4) 津本匡徹, 丁志映, 田中大樹, 小林秀樹:「日本における異世代シェア居住の実態 - 各国におけるシェア居住に関する研究 その3」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 1075～1076, 2014年9月
- 5) 田中大樹, 丁志映, 津本匡徹, 小林秀樹:「フランスと日本における異世代シェア居住の比較 - 各国におけるシェア居住に関する研究 その4」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 1077～1078, 2014年9月
- 6) 鈴木雄也, 高田健司, 津本匡徹, 丁志映:「各国におけるシェア居住に関する研究 その8 - スペインにおける異世代ホームシェアプロジェクト『VIVE Y CONVIVE(ビベ・イ・コンビベ)』について -」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 163～164, 2016年8月
- 7) 中井萌, 丁志映:「スペインにおける異世代ホームシェアプロジェクト『CONVIVE(コンビベ)』の運営体制と効果 - 各国におけるシェア居住に関する研究 その10 -」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 253～254, 2018年9月
- 8) 井上早帆, 菊地吉信:「フランス COSI ネットワークによる異世代ホームシェアの運営システム」, 日本建築学会計画系論文集, 第79号, No. 703, pp. 1985～1994, 2014年9月
- 9) 小林稜, 菊地吉信, 井上早帆:「スペインにおける異世代ホームシェアの運営システム」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 379～380, 2014年9月
- 10) 小林稜, 菊地吉信, 井上早帆:「ドイツにおける異世代ホームシェア事業 WOHNEN FÜR HILFE の運営システム」, 日本建築学会技術報告集, 第21巻, 第49号, pp. 1259～1262, 2015年10月
- 11) 佐倉弘祐, 須藤悠:「異世代ホームシェアに適した住居評価指標作成に関する研究」, 日本都市計画学会都市計画報告集, No. 19, pp. 525～528, 2021年2月
- 12) 川崎一平, 永井邦明, 原田瞬, 森本誠司, 佐川佳南枝, 吉田健, 小川敬之:「日本の異世代ホームシェアの実態とそれぞれの世代に与える影響」, 日本世代間交流学会誌, vol. 12 (No. 1), pp. 3～12, 2022年
- 13) 栗林梓:「異世代ホームシェアの展開と学生の利用実態 - 「京都ソリデール」事業に着目して -」, 人文地理 第74巻 第4号, pp. 409～428, 2022年

<研究協力者>

竹山渚, 野上桃香(京都女子大学 2022年度卒業), 松本めぐみ(京都女子大学 2023年度卒業), 松本結吏(京都女子大学 2024年度卒業予定)